

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第733号 平成26年5月12日

## 父の生きる

「父の生きる」は、父を看取るまでの3年半を介護した娘（伊藤比呂美さん）の記録です。

親を介護した様子は多くの方が本にされていますが、「父の生きる」は、カリフォルニアに在住する伊藤比呂美さんが、熊本で一人暮らしをしている90歳近い父親の遠距離介護を、詩人としての鋭い目で記録したものです。

伊藤さんは父親が亡くなるまで、2か月間はカリフォルニアで家族と暮らし、半月間は熊本で父親と暮らすという2重生活を選択すると共に、カリフォルニアにいる間は父親に毎日電話をし、父親の愚痴を聞くという生活をやり抜きます。

自分自身にも家庭があり、しかも、17時間もの時差がある遠距離介護は、「大変」という言葉ではいい尽くせない、凄まじいものがあったに違いありません。

伊藤さんは、父親の介護をしながらその父親からさんざん愚痴を聞かされるのですが、ある時ふと父親の言葉を書き留めたところ、「寂しさと不満のカタマリであったはずのそれが、むしろ面白いと感じるようになりました。いえ、表面的にはいまだに寂しさと不満のカタマリで、私に向けられると辛いんですが、目を凝らせば、その中に父がいきいきと生きていた！」と述べています。

「人はいつか必ず死ぬ」ものです。しかも、その時が来たら、一人で旅立たねばなりません。その寂しさは死に対する恐れとなって私達に押し掛かって来ます。だから、自分の心の中では、死を遠いもの、実感のないものにしようとしているように感じます。

伊藤さんの父親は、元々は熊本が地元でないために友達はおらず、する事もないという「孤独と退屈」という沼に落ち込んでいます。

ある時伊藤さんが「仕事が終わったよ」というと、父親は「おれは終わらないんだ」といいます。

「仕事がないから終わらないんだ。つまらないよ、ほんとに。なーんにもやることない。」「ほんとに退屈だ。これで死んだら、死因は『退屈』なんて書かれちゃう」

こうした父親の言葉に対して、伊藤さんは、「死はどんどん近づくが、どんなに近づいてもやはり遠い。その怖くて遠い道を一人で歩いて行く。一步一步、重たい足を引きずりながら。そこにたどり着くまで、一日また一日を生き延びる。その孤独を、その恐怖を、娘に打ち明ける父であります」と記しています。

私は、二親だけではなく息子も亡くしていますが、「父の生きる」を読みながら、父や母、そして息子の言葉に、伊藤さんの様に耳をそばだて、寄り添っていただろうかと、今更ながら悔いを感じています。

伊藤さんは、父親が亡くなった時、無性に涙が出たといいます。

「悲しいというのではない。悲しくない。後悔もしていない。早すぎたとは思わない。意外でもなかった。悲しいというのではない。ただたんに父の死に顔やからだを見ていると、子どもだった頃の父が思い出されてきて、なつかしいのである。なつかしさのあまりに涙が出る。」

「人一人、私にとっては凄く意味のあった人が一人いなくなって、ぽかんと空いている。そこに自然と流れ込むように、ただ、ただ、涙がこぼれていくような感じである。」

私には、ぽかんと空いた心の空間に涙が自然にこぼれていくという感覚は、良く分かります。心の隙間を涙が埋めてくれている、その感覚を私は大事にしたいと思っていますのです。（塾頭：吉田 洋一）